

# 如月興人行形淨瑠璃

17-2



塵染文 四橋畔

12  
2

◇戦亞東大うか抜ひ戦◇



# 乍 憚 口 上

皇軍の向ふ處戰勝赫々として世界に輝き誠に御同慶の至りに奉存候然る處當座に於ても國內の皆々様が日夜の御熱誠なる銃後のお勤めに對して尤も文化的に明日への御活動に備ふるよりよき御慰樂を差上ぐる可く種々苦心配慮仕り當月も引續き總出演の豪華配役を以て秘藏狂言を時間の許す限り豊富に配列いたし太夫三味線人形連中全員愈々報國的熱演を以て御目見得致す可く殊には戰捷祝賀の意を籠めたる新作曲をも御試覽に供し度幸ひに御批判を賜り度尙又當興行にては野澤喜代之助改め五代目野澤吉三郎、吉田文作改め三代目桐竹龜松兩名の襲名披露を申上ぐ可く元より時節柄華美虚飾に亘る儀は差控へ唯々日頃の御恩顧に酬ふ可く車輪に相勤め可申候間何卒相變らず御引立御來場の程偏に奉御願申上候

昭和十七年二月一日

四ッ橋畔

文 樂 座 敬白

昭和十七年二月一日初日

初日 午後一時半開演  
平日 午後二時開演  
(午後八時終演豫定)

・御 觀 覽 料・

一等席 御一名 金三圓五十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席(一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符

專用電話

一般御用

の電話

南 ⑦ 四七壹壹番

南 ⑦ 三〇三二番

南 ⑦ 三七八八番

お草履の準備は御座めますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。



## 櫓 下 の 話

祐 田 善 雄

古鞞太夫の櫓下認許に關聯して、櫓下と紋下との相違を説明致しませう。

一言すれば、櫓下とは座の表中央、即ち櫓の下に當る場所へ『太夫 豊竹古鞞太夫』と書いた招牌を掲げる事によつて豊竹古鞞太夫を櫓下といひ、番附面の最初の一行の松竹の紋處の下に『太夫 豊竹古鞞太夫』と署名のある位置によつてこれを紋下と呼びますが、櫓下も紋下も同一人の二つの表現形式であつて、職掌の權利義務は全く同じの最高位置を占めるものであります。三味線座頭の鶴澤友治郎、人形座頭の吉田榮三が列席して白井松竹會長から櫓下の認許を受けたので、太夫、三味線、人形の總座頭を意味する格に當ります。

「櫓下」の名稱の起りである「櫓」は現在浪花座、中座、角座、弁天座に名残りを止めてゐますが、新しい建築様式の文樂座にはありません。昔はこの「櫓」が興行權を示してゐたので、重大且最高のものでした。それ故「櫓下」は一番重い位を指示するわけです。

「櫓」の始まりは非常に古く、大阪の陣の終つた頃と言はれてゐますが、當流義太夫節を創始し道頓堀の竹本座で旗上げをした時にも櫓を掲げましたし、豊竹座も櫓を掲げました。この二座は正式の操芝居と認められ、所謂「御免櫓」の官許公認芝居です。道頓堀の櫓として大歌舞伎と對峙した所謂「本座」なのであります。これに對抗して簡便な芝居小屋が社寺の境内、例へば生玉、座

摩、稻荷、阿彌陀池、御靈、天満等諸所に出来ました。

この小芝居、濱芝居、宮地（寺）芝居、社地芝居は度々の制令にも拘らず禁止する事が出来ないで、終には十五日、二十日等と興行日数を區切つて許可する事になりました。従來の實績を認めた結果、小芝居株即ち興行權が生じたのですが、御免櫓の本座と違ひ、一段格の低いものです。

竹本座、豊竹座の崩壞に伴つて、操芝居はこの宮地芝居、濱芝居で興行したり、本座の空櫓で興行し續けたのですが、同じ櫓といつても竹豊兩座の頃とは趣が違ひます。古い本に「軒を並べし櫓芝居にて先づ（興行）出来がたく」と皮肉られたのは、本座より宮地芝居に墮ちた事を言つてゐるのです。

株が生じた結果櫓を掲げました。文樂軒の芝居が高津の小屋掛けより稻荷境内に進出したのは何といつても出世です。その頃になると、宮地芝居といつても操芝居で

は一方の覇者でした。處が、天保十三年（百年前）の改革によつて社地芝居は禁制になり、本座の芝居だけが官許された結果、文樂軒の芝居も閉座の止むなきに至つたのですが、年月の経過に伴ひ、いつしか法令も弛み、安政四年十二月（八十五年前）になつて興行御免になりました。あしかけ十六年間に、小屋掛けや寄席や道頓堀の空櫓で興行して命脈を保つ辛苦艱難の状態だつたのです。

太夫や三味線はどうかゆけましたが、人形遣は全く食ふにも食へない辛酸を嘗めました。禁制の間にも色々な口實を設けて稻荷で復歸興行をして居ますが、櫓即ち興行權を持たない芝居には非常な苦勞があつたでせう。

かくして櫓官許になつたのですが、世情は次第に騒然となつて來たでせう。御免櫓を得た喜び、中空に掲げた櫓の凜々しさ、その下に座頭一枚看板を堂々と据え、再出發の景氣と緊張、それが「櫓下」となつて現れたのでせう。

安政元年（八十八年前）には「櫓下」の名前が見えて  
ゐますから、恐らく「櫓下」といふ名目はこの時分を越  
る事餘り遠くない頃に、總座頭の權能を持つに到つたの  
ではないでせうか。

「忠孝昔物語」や、寄席の看板と一連の繋りはありま  
すが、三代目長門太夫を櫓下座頭といつて呼んでゐます  
から、この頃名實共に「櫓下」現在——呼んでゐる「櫓  
下」の權能が、言葉の中に具備されたものと考へられま  
す。

現在櫓下太夫の看板と共に『官許人形淨瑠璃文樂座』の  
櫓下看板があります。五代目春太夫が明治五年正月、松  
島文樂座新築の櫓下即ち紋下になつた時「人形淨瑠璃」  
と「淨瑠璃」の上に「人形」を置くのを難詰した話が傳  
つてゐますが、古くは「淨瑠璃操」「操淨瑠璃」單に  
「操」と呼んだので、「人形淨瑠璃」の名と共に、看板  
も恐らく明治五年に創められたものでせうか。

明治五年には幾多の改良を加へてゐます。松島遊廓設  
置に伴ふて、日頃抱負の文明開化を實行して、番附に  
「御免」の二字、櫓下看板に「官許」の二字を加へ、人  
形紋下を創め、「櫓下」の語を「紋下」と改めたのもこ  
の時かと想像してゐます。

小屋の改革についてはこゝで述べませんが、幾多の進  
歩改良が認められ、人形の大きさに迄影響を及ぼしてゐ  
るやうです。

ともあれ、強ひて區別すれば、明治になつて芝居内では  
「紋下」の語が用ひられ、好事家の間では「櫓下」の  
語を使い、「座頭」ともいひ、色々互に流用してはつき  
り區別する事は出来ませんが、「櫓下」も「紋下」も夫  
々の來歴を持つてゐるにしましても、その實體は芝居の  
最高地位を意味するものと思つて頂けば結構です。



壽ことぶき式しき三さん番ばん叟そう

翁 竹本 七五三太夫  
 千 歳 竹本 常子太夫  
 三番叟 竹本 長尾太夫  
 三番叟 竹本 伊勢太夫

豊竹本 常子太夫  
 豊竹本 津磨太夫  
 豊竹本 呂賀太夫

元來「三番叟」は芝居の始まる前の儀式として行つたもので、演劇の起原が神事に聯關してゐることを暗示してゐる。所でこの「三番叟」が能の「翁」から來た事は周知のことであるが、歌舞伎や音曲へ入つて儀式的の場合にのみ「翁」が尊重され、見た目の樂しさ、旋律の興味は寧ろ三番叟の方に集められた。随つて音曲では通稱「何々三番」と云ふ位三番叟中心になつて居り、殊に本曲では三番叟が二人出てへト〜になるまで踊り競べをする所が特色となつてゐます。さて餘談乍ら、翁の白面は白色人種を、三番叟の黒面は黒色人種を、千歳の直面は黄色人種を現はしてゐるとも云ふ。

(床本) 壽式三番叟

夫豊秋津洲の大日本。國常立の尊より天津神七世の後地神の始天照大神岩戸に籠らせ給ひし時。世に常闇と成りけらし。其時に四方津神。八百萬の御神達、神集に集





パン、物に心得たる後の太夫殿にげんぎう申せう、アト  
 てうど参つて候、サンパン、誰お立候ぞ、アト年頃の朋  
 輩友達御後の爲に罷出で候、今日の三番叟猿樂、きり／＼  
 尋常に舞ておりそへ、色の黒い尉殿、サンパン、此色の  
 黒き尉が今日の御祈禱を千秋萬歳所繁昌と舞納めふずる  
 事は何より以て安ふぞう。先後の太夫殿は元の座敷へお  
 も／＼と御直り候へ。アト某が元の座敷へ直ろうずる事  
 は尉殿の舞よりもいと安ふぞう、御舞なふては直り候ま  
 じ御舞候へ、サンパン、御直り候へ御舞候へ、サンパン  
 あゝゆるばたしやアトさらば鈴を参らせふ、サンパン、  
 そなたこそ、初日は諸願満足圓満二日の日は又二ツ柱銅  
 女の神子が一、二、三、四、五、六、七、八、九度か百  
 千萬の舞の袖五月のさ女房が笠の緒を列ねて早苗おつと  
 り打上げて諷ふた千町萬町億萬町三人田をばぞんふりぞ  
 〳〵そんぶり〳〵ぞ御田を植るならば笠かふて着せ  
 ふぞ、笠買ふてたもるならば猶も田を植ふよ、三日は福  
 徳壽福圓満子徳人の子寶車座にならべた。たつまついる  
 まつかいづくひつ付火うち袋にふりりと付て候ぞ、是式  
 三の故實にて、三日、是を舞とかや柳は緑花は紅、數々  
 や濱の眞砂は盡る共、盡せぬ和歌ぞ敷島の神の歌の國津  
 民治まる家こそ目出たけれ。



13

三浦之助別れの段

人形役

前

富田六郎	女房おくる	讚岐の局	阿波の局	三浦之助母	時浦之助	三浦之助義村
桐竹門造	桐竹政龜	桐竹紋太	吉田小兵吉	吉田文五郎	桐竹紋十郎	吉田光之助

豊竹澤勝伊仙呂太  
 豊竹澤勝伊仙呂太  
 豊竹澤勝伊仙呂太  
 豊竹澤勝伊仙呂太  
 豊竹澤勝伊仙呂太  
 豊竹澤勝伊仙呂太  
 豊竹澤勝伊仙呂太

鎌倉三代記

三浦之助別れの段  
 佐々木高綱物語の段

享保三年正月(二三七八)豊竹座上演の紀海音作の同名のものがあるが本曲とは別のものである。

本曲は、天明元年三月廿七日(二四四一)より江戸肥前座に上演された全十段よりなる作者不詳のもので題材は大阪夏の陣を素材にして世界を鎌倉にとり、三浦之助は木村重成、時姫は千姫、佐々木高綱は眞田幸村、北條時致は徳川家康で、坂本城を大阪城に假託したもの。

戀と孝とのデレンマに陥つて苦悶する悲劇的人物として時姫を描いたこの第七三浦内之助の段が全篇の山となつてゐる。別にこの第七三浦内の段を八ツ目とも云ふがこれは第二評議の次に松原を第三に立て、和田兵衛館を四つ目にして順ぐりに敷へた結果で文化十一年五月(二四七四)の豊竹座の興行には既に斯うなつてゐる。尚、こゝに注意すべきは作意上よりみて「近江源氏先

佐々木高綱物語の段

切竹本 大隅太夫

鶴澤清次郎

人形役割割

時 姫 桐竹紋十郎

安達藤三郎 實ハ佐々木高綱 吉田 榮三

三浦之助 義村 吉田 光之助

女房 おくる 桐竹 政龜

富田 六郎 桐竹 門造

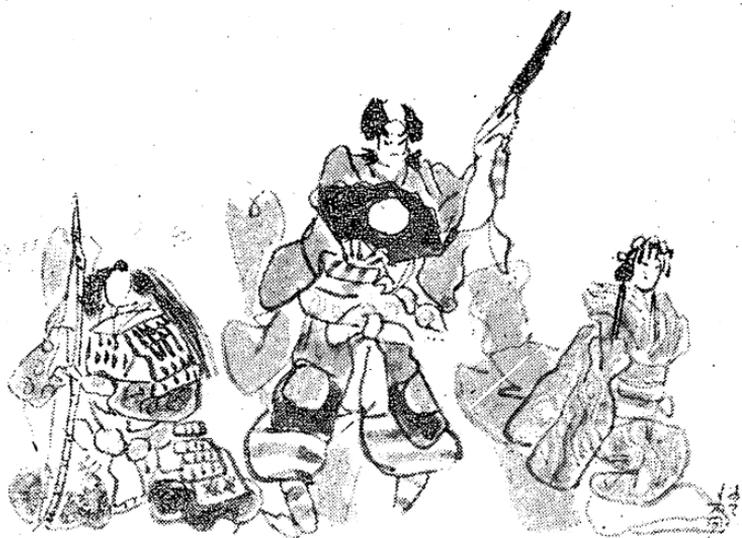
三浦之助 母 吉田 文五郎

梗概

坂本城の頼家公と鎌倉の北條時政公と不和となり、遂に戦端が開かれた。

三浦之助義村は幼時より母に別れて坂本城に奉公してゐたが、母が大病と聞いて戰場から痛手をおさへて絹川村の閑居を見舞に駆けつけた。母の看病をする時姫は時政の娘で、三浦之助の許嫁である。母は我子の未練を喜ばなかつたが、時姫は

陣館」(明和六年十二月廿二四二九再興の竹本座上演の近松半二他の作)に次いで同じく竹本座に明和七年五月廿二日より上演され、その筋から上演禁止を命ぜられた(六月十六日限り中止、爲めに正本出でず)作者不詳、(近松半二とも)の「近江源氏太平頭齋飾」全九段で、これが恐らく改修され、江戸で復活上演されたのがこの「鎌倉三代記」である事である。そしてこの江戸での初演後間もなく同年六月には大阪堀江市の側の芝居でもこの「鎌三」は上演され、同八月には「花飾三代記」と題して讀本淨瑠璃として刊行もされた。



夫が歸つたので飛び立つ計り、然し三浦之助にとつては敵方の大将の娘とて、夫に立てる操があれば父時政の首を討てと命ずる。

時姫は之より先父時政からも三浦之助と縁を切り其の證據に母を殺して戻れと命ぜられてゐる。夫につくか、親の味方か、恩と戀との二途に立ち今は絶對絶命の板挟みとなつたが、遂に思ひ切つて、北條時政打つて見せようと返事して遙かに父に詫びた。

先に阿波の局と讃岐の局とは時政の命によつて時姫を連れ戻らうとして居る。富田六郎も忍んでゐる。阪本方の佐々木高綱は安達藤三郎に面相が似てゐる爲、變名して鎌倉方の内幕に潜み、表面は鎌倉方と見せかけてゐた。

始終の様子を立聞いた藤三郎の女房おくるが、行かけるのを三浦之助が捕へる。おくるに促されて六郎が井筒へ駆け寄つたが、下から突出された槍に命を落す。井筒よりは藤三郎實は佐々木四郎

高綱凛々しい姿で現はれ、石山の陣でおくるの夫藤三郎と身を換へ、藤三郎は高綱の身替りに討たれた始終を物語り、時姫を促して時致の陣所へ歸らうとする。

小手調らべに突出した時姫の槍に老母は貫かれて、父への土産は出来た。この姑への返禮を忘れるなど激勵する。

あとに心をひかれ乍ら、佐々木高綱に勵まされて三浦之助は勇んで戰場へ馳せ向ふ……。

### (佐和利) 三浦之助別れの段

時姫あはて抱き留め、のふコレ待て下さんせ、折角顔見た甲斐もなふ最ふ別かるゝとは曲もない、親に脊いてこがれた殿御、夫婦のかためない中はどふやらつんと心が濟まん、短い夏の一夜さに忠義のかくる事もあるまいは程までに付したふわたしが心思ひやつてくれもせで、心強やと緋絨にうち紫の色深き。

### 佐々木高綱物語の段

真中にどつかと座し時姫の不審尤もあれに居るおくる

が夫藤三郎といひしは面体我に見まがふばかり似たるを幸ひ價をくれて命を買取り去年石山の陣にて北條家を欺むきし佐々木が腹首こそ彼藤三郎、僅かの恩に不便の最期女が心思ひやる、龍は時を得て天地に幡る時を失へばいもり蚯蚓と身を潜む、我君の爲に軍慮をめぐらし肺肝を砕くといへども頼家公の武運拙なき、なす事する事一つもならず、此度の合戦は坂本城滅亡の時、天より亡ぼす主人の運命へエ、無念の鬱憤止む事なくもはや斗略の術つきはてたるせんのかつまり、百計の中のたつた一計、おくるに得と申しふくめ死したる藤三が名をかつて、産の土民に拵らへ濟し指にも足らぬ端武者共に安々と生捕られ時政の前に引出されしは地獄の上の一足飛未だ天道捨賜はざる印しにやさしも明察の北條殿匹夫下郎に相違あらじとコレ此つらに入れ墨をさゝれし時の其嬉しさ此印しある時ははくちうに往來する共佐々木ととがむる者もなし、我命だにあるならば時節を待て再び京都の旗下にひるがへさんと心の笑、折節姫を迎ひの使者言ひ付けられしはハ、アこれ幸ひ百萬の大軍より討取がたき一人を討つ謀りごととは姫にありと密かに三浦へ内通ししめし合はせし計略はづれず姫の心底極まる上は大願成就時來れりハ、ハア、ハア、ハア、嬉し／＼悦こばしといさめる面色威あつて猛く實に名にしあふ坂本の總大將と類ひなき。



道行戀の小田巻

おみわ

桶姫

竹本重太夫  
竹本呂太夫  
竹本伊達太夫  
竹本富瀨太夫

ッ

竹本三瀨太夫  
竹本常子太夫  
竹本津磨太夫

竹本宮太夫  
竹本松島太夫  
竹本南次太夫

レ

竹本南次太夫  
竹本松島太夫  
竹本南次太夫

豊澤廣助

妹脊山婦女庭訓

道行戀の小田巻

古く幸若舞曲の「大職冠」を承け、操淨瑠璃に藤原鎌足と蘇我入鹿大臣のことを仕組んだものに正徳元年（二三七一）竹本座上演の大近松作「大職冠」寛保三年（二四〇三）四月、竹本座上演の竹田田雲作「入鹿大臣皇都諍」があり、これに暗示を受けて作られたのがこの「妹脊山婦女庭訓」全五段で、作者は近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南に後見として三好松洛が名を列ね、明和八年（二四三一）正月、竹本座に上演された。結構は雄大、趣向は奇妙、正に王朝物の代表作で、大和方面に古來有名な説話傳説を活用し巧妙複雑な技巧の極致を見せてゐる。殊に全五段の中ではかの三段目切山の段が舞臺技巧の頂點を示すものとして名高く、この道行はその第四段目に當り、饜七上使、姫辰り、金殿へと續いて行く。

(床本) 道行戀の小田卷

お 求 橘

三

輪 女 姫

文作改め  
桐 竹 龜

松

吉田 文五郎  
桐竹 紋十郎

人 形 役

割

豊澤 猿二郎  
鶴澤 叶

求 女  
ツレ 豊竹 和泉太夫

豊澤 仙松  
野澤 吉藏

鶴澤 友十郎  
豊澤 廣二

(野) 鶴澤 友勝 門平

常闇の夜々毎に通ひては又歸るさの道もせきもせそれ  
も何故戀故にやつるゝ所體はづかしと佛隠す薄衣につゝ  
めど薰り橘姫、思はぬ人を思ひ詫心のたけをくどけども  
つれなき松の下紅葉こがれてたへんたまのをも殿故なら  
ば捨草も暫しはいかふ芝村の賤の男が置手拭で忍び忍び  
の出あいづま晩にござらばナコレのんやほんにさ脊戸の  
柿の木の枝こへて連理を契る言の葉はそれも戀中爰はま  
た箸中村よ一もつの長者が後と名にひゞく釜が口をも出  
放れてあゆむにくらきくれ竹のしげれる中を分行けば葉  
毎の露がほろ／＼とほろ／＼打なる雉子の聲思ひくらべて  
いとゞ猶心細野に立つくすにくやかゞしにおどさるゝわ  
れが姿に又おぢてはつと立行羽風につれてちり／＼ちる  
や柳本流るゝ水に裾ぬれて物思へとや帯とけの里羨し自  
はついに一度の情さへないて身をしる涙雨ふるの社の御  
燈の影か松の木の間にちゝちちと見へつ隠れつ歸るさの  
後を求女がしたひ來て、互にはたと行合の星の光りに顔  
と顔、ヤア戀人か何故に爰迄後を追鳥はもしや埒の契り  
をも叶へてやるとのお心かと胸にはいへど詞には面はゆ



ぶりの袖几帳なるほどせつなる心ざし仇に思はじさりながらさほどこがるゝ戀路にて、晝をば何とうば玉の夜斗りなる通ひ路はいとふしんなり、名所を聞いたる上はこなたより二世のかためは願ふ事明させ賜へとひたすらに問はれて實にも恥かしのもつて餘れる愛身の上語るにつらき葛城の嶺の白雲有ぞともさだかならざる賤の女と思ふて深い疑ひの雲を晴して自が思ひも晴らして賜はらばどんな仰も背くまい、たとへ草葉の露霜と消ても何のいとやせぬ、これ程思ふに胸愆なとけぬお前のお心は餘りむすぶの神様を祈り過したとがめかやつれなの君やと恨詫思ひ亂るゝ薄かげ、それとお三輪は走り寄り中を隔てゝ立柳立退く袂引とゞめ、エ、聞へませぬ求女様、ソリヤ氣の多い悪性なそもや二人が馴れ初めは、始めて三輪の過し夜に葉ごしの月の倂はお公家様やら侍様やらしれぬ形ふりすつきりと水際の立よい男外の女は禁制としめてかためし肌と肌、主ある人をば大膽な斷りなしに惚るとはどんな本にもありやせまい、女庭訓躰方よふ見やしやんせエ、嗜みなされ女中様、イヤそもじ逆たかちねのゆるせし中でもないからは戀は仕がちよ我殿様、イ、ヤ

### 桐竹龜松の代々

#### △初代

明治期の女形遣ひの名人吉田辰造の門に入つて辰吉と名乗り、ついで桐竹龜松と改名(明治十七年彦六座)。振袖物、三枚目もの、及び荒物をも得意とし、殊に所作事の足を遣つては並ぶものがなかつたと云はれる。晩年は不遇で明治卅一年一月歿す。

#### △二代

現吉田文五郎の前名。十六歳の時、吉田玉助の門に入り養助と名乗る。明治四十一年二代桐竹龜松を相續し(京都南座に出勤中)、間もなく翌四十二年吉田文五郎と改名し今日に及ぶ。

#### △三代

約廿年前現吉田文五郎の門に入り吉田文作を名乗る。支那事變勃發と同時に召されて大陸に赫々の武功を樹て去る十五年五月歸還。以後藝道に精進中、當興行より三代龜松を襲ふ事になつたもの。

(主として吉田文五郎氏談による)

わたしがイヤわしがとゝのに縋りつ手を取つて圍に色よく咲草時は男女になぞらへいはゞ言はれふ物か夕顔の梅はものゝふ櫻は公家よ、山吹は傾城杜若は女房よ、いろは似たりや菖蒲はめかけ、牡丹は奥方よ、桐は御主殿姫百合は娘ざかりとなでしこのサアなるぞへゝゝなるとならずとなら坂や兒手柏の二人の女にらめばにらむ萩と萩中にもたるゝ男べし放ちはやらじと縋り付きこなたが引けばあなたがとゞめ戀の柵葛葛付きまとはれてくるゝゝゝ廻るや三つの小車の花よりしらむ横雲のたなびき渡りありゝゝと三笠の山も程近く鳴る鐘の音におどろく姫歸る所はいづくぞと求女が氣轉振り袖の端にぬふてふ取りかはす縁のおだ巻いとしさの餘つて三輪も愜氣の針男の裾に付ける共しらずしるしの糸筋をしたひしたふて。



佐川の段

四條河原の段

竹本相生太夫  
野澤吉五郎

人形役割

横淵官左衛門	吉田玉市
仲買勘造	吉田多三郎
井筒屋傳兵衛	吉田玉幸
廻しの久八	吉田玉徳

おしゆん 傳兵衛 近頃河原の達引ちかごろかはら ちひまき

四條河原の段  
堀川猿廻しの段

「それや聞えませぬ傳兵衛さん」で有名なこの淨瑠璃は、その實、作られた時も、作者も未だ詳でない。天明五年五月五日（二四四五）から江戸の肥前座で上演された時の正本に作者として爲川宗輔、筒井半二、奈河七五三助があげられてゐるのは恐らく既作品に少々筆を加へたものであつて、この事はこれより先き天明二年には江戸外記座で八重太夫が堀川の段を語り、天明三年には大阪北堀江座で、同じく八重太夫が堀川を語つたと云ふ記録が残つてゐる事から推して考へられる。とも角、本曲は上中下三卷六段からなり、堀川の段はその中之巻に當る。そしてこの全曲は新作と呼ぶに憚る様な成立過程をもつてゐる。即ち本曲より以前に作られた有名な二つの淨瑠璃——明和元年五月（二四二四）竹本座上場、「京羽二重娘氣質」近松半二、竹本三郎兵衛作、並びに明和

堀川猿廻しの段

切豊竹古靱太夫

鶴澤清六

ッレ 鶴澤友衛門

人形役割割

與次郎の母 吉田小兵吉

弟子おつる 桐竹紋司

兄 與次郎 吉田榮三

娘 お俊 吉田文五郎

井筒屋傳兵衛 吉田玉幸

五年十二月、北堀江座上場、「紙子仕立兩面鑑」、菅專  
助作——から大たいの構造、詞章まで借用して寄木細工  
式につくりあげられた作品である。

更にその素材となつた實説も正確には分らない。たゞ  
普通よく説かれてゐるのは元文三年（二三九八）中に京  
都で起つた三つの事件、即ち吳服屋井筒屋傳兵衛と先斗  
町近江屋の抱へお俊の聖護院の森の情死事件（十一月十  
六日）、四條河原に於ける公卿侍と所司代の下部との刃  
傷沙汰（十一月十三日）、堀川に住む猿廻し丹波屋佐吉  
が孝子として表彰された事（九月廿七日）を取入れて脚  
色したと云ふ説が廣く行はれてゐる。

梗概

冬ざれて川風寒く吹きすさぶ四條河原の夜。傳  
兵衛の戀人おしゆんに横戀慕の横淵官左衛門は、  
主家の寶物詮議中の傳兵衛を、寶物一件にかこつ  
けて此處へ誘ひ出し殺してしまはうと悪企みをし  
てゐた。

そんな事とは露知らぬ傳兵衛は、官左衛門が持

つてゐると云ふ寶物を讓つて呉れと頼みに頼む。然し官左衛門は河原の石に叩きつけて寶物の茶入れを打ち壊し、その上、傳兵衛を殺しておしゆんを我がものにするゝ罵る。

今はたまりかねた傳兵衛。最早これまでと官左衛門に斬りつける。そして石に滑つた官左衛門を殺してしまつた。

犯した罪に傳兵衛は自害しようとする。然し折柄駆け付けた久八の計ひでこの場を落ちる事になる。

それから數日経つた……。

おしゆんの母は京の堀川邊に住居して琴三味線を教へ、長男の與次郎は猿廻しとなつて貧しう暮してゐる。師走の十五日、教へ兒のおつるが習ひに來たので、鳥邊山の唄の三味線を教へて歸す。日暮前に與次郎は小風呂敷を持ち猿を肩に載せて戻り、盲目の母をいたはつて慰めた。母は「廓の

主人が娘を連れて來て、おしゆんと戀仲の傳兵衛が人殺しをした爲、おしゆんを内に置き難く、どうぞ傳兵衛に逢はせぬやうに匿まつてくれと言うて歸つた」と、語つて嘆いた。

與次郎は往來の人に聞かれぬやうに門口を鎖しおしゆんを呼んで母と共に懇に諭し、傳兵衛との縁切り狀を書かせたが、母は盲目、兄は無筆であるから、何を書いたか知らぬども、おしゆんが氣休めの言葉に安心して三人共に寢所に入つた。

夜更けて傳兵衛は、おしゆんを尋ねて來て戸を叩いた。寝ないでゐたおしゆんは飛び出て「傳兵衛様よう逢ひに來て下さつた」と、言ひながら戸を明けた音に、母も兄も目を覺す。臆病者の兄はあわて、暗紛れに取違へて、おしゆんを縮出し傳兵衛を内に入れ、燈火を點して見れば傳兵衛であるのに驚き、おしゆんの縁切り狀を突付けた。傳兵衛は怨しげに之を受取つて讀めば、女の守るべき道を説き、傳兵衛と共に死ぬ覺悟を述べ、どう



此處橋下

豐豆竹古鞆太夫  
相勤の申候

梅

ぞ不孝の罪をお赦し下されと、こまごまと記した書置である。三人ともはつとたまげ、「さてはさうした心であつたか」と、與次郎は急いで娘を引入れる。

傳兵衛は「わしをさうまで思うてくれるか忝いお前はお二人の爲に生き長らへて、我が死後の弔を頼む」と泣けば、おしゆんは「そりや聞えませぬ傳兵衛様」と、女の守る道を語つて自殺しようとする。母も與次郎も之を押し止め、娘の貞心に感じて傳兵衛に任せ「二人共に逃げられるだけは逃げて、死なずにゐてくれ」と別れを悲しむ。

與次郎は傳兵衛に編笠を與へて姿を變へさせ、門出の祝として酒を酌み交し、猿廻しの唄を歌うて猿を舞はし、互に此の世の見納めと名残りを惜しむ。かくておしゆん、傳兵衛は母と兄とに見送られ、聖護院の森をさして出でて行く……。

(床本) 堀川猿廻しの段 (切)

おなじ都も世につれて、田舎がまし薄煙、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線指南屋も、合の手もつれ氣もつれを、保養がてらの薬風呂、あぶぐも我を濫鬪扇、目さへ不自由な暮しなり、おつる様待ち遠ほにあらうな、そしてなにやらさのさらへであつた、オ、それ鳥邊山、アリヤじたい心中事、會にでも弾くのならばお前は女の方、お繁さんは男の方、かけ合ひにうたふがよいぞへ、ドレ／＼お繁さんのかわりに、私と掛け合ひにうたひませうと、老手彈手もしほらしき、女肌には白無垢や、上に紫藤の紋中着緋紗綾に黒繩子の帯、年は十七初花の、雨にしほるゝ立姿、男も肌は白小袖にて、黒き輪子に色淺黄裏二十一期の色盛りをば、戀といふ字に身を捨て小舟、どこへ取り付く島とてもし、鳥邊の山はそなたごと、死に行く身の後髪、弾く三味線は祇園町茶屋のやま衆が色酒に、亂れて遊ぶ騒ぎ合ひ、あの面白さを見る時は、ア、イエ／＼、しほれがない、あの面白さを見る時はと、かう調ひなされ。アイ、あの面白さを見る時は、オットヨシ／＼染殿そなたと某が去年の初秋七

夕の、塵敷踊りをかこつけて、忍び逢ふた事思ひ出す、オ、今日はマアそこ迄、精が出る程あつて、きつう手も廻り出した、モウ、どこで弾きなさつても恥かしい事はないと、聞いて笑顔の片男波、又明日といふ汐に、お鶴は立つて歸りける。母を大事と油断なき、見過ぎも輕き小風呂敷、肩に乗せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前與次郎はいきせき門口から、母者人今戻つたぞや、オ、兄戻りやつたか嘘ぞひもじかる、茶も湧いてある、膳もそこに置いて置いた、オ、徳よ今戻つたかよ、今朝から子猿めが親を尋ねてやかましい、ソレちやつと傍へやつてやりや、アイ、左様でござんしよとも、ソレちやつと乳を吞してやりおれ。イヤノウ與次郎、そなたが孝行にしてたもるに付け、わしが此の長々の病ひも、いつ本服する事であらうと思へば、勞れの上に猶ほ勞れる、僅な弟子衆の餘情や我身の働きて、此の養生がなるものかと思へば、薬も毒となり、母ではなうて子供の爲めには苛責の鬼と思はるゝ、鬼は冥途にあるものを、つれなの老ひの命やと、身を悔みたるむせび泣き、哀れにも又いちらし。ア、コレ母者人、ソリヤマア何を云はんすぞい

の、其の様にみそやかな身代ぢやと思はしやるか、此の間弟子入りした米やの息子殿から長々お袋の煩ひで、嘘かし勝手が悪るからうと、云ふて雪か花かと申すやうな白米の仕送り、店々の旦那衆から、何なと用があるなら云ふておこせ、若し出養生さしますなら、幸ひな隠居所もある程にと、云ふて來るお方もあり、羊羹饅頭生魚、近所隣へ早々すそわけもしられねば鯛赤貝の類は横町の鮮屋へ卸賣、コレ案じる事は微塵もないぞや、それにまだ、まだ、氣の毒なは、此の家主が此の家を居なりに、買ふてくれぬかと頼まれる。ヤレいやゝの、ア、あた世話な家持よりは金持が、遙かましてあらうかと、母に案じをかけさせぬ、せい八百さへ一貫にたらぬ節季の事譯を云ふ下稽古やこれなるべし。嘘とは知れど老の身は子に従ふが慣ひぞと機嫌よげに打ちうなづき、オ、それ聞いて落付きました、落付かぬは娘が事、此の間も親方が、おしゆんを預けに來ていはしやるには、コレ傳兵衛殿と云ふ客の事でもと内に置かれぬ事がある、譬へ傳兵衛が尋ねてござる共、おしゆんが歸つて居る事は包み隠さねばならぬぞやと、くれ、も云はしやつたぞ

や、サアわしも其の入り譯を聞いた故、おしゆんが心根を思ひやり、思はず涙が、ドレ灯を燈そと棚のすみこて、取り出す行燈の、灯かげも洩るゝ暖簾ごし、おしゆん、コレおしゆん、アイと返事もしほくと、思ひなやみし顔形、マアく愛へと小聲になり、門の戸はかけてあり見る人も聞く人もない、方々で噂を聞くに、此の間の川原の喧嘩殺し人はサ殺し人はわが身の客の傳兵衛殿なれど大恩請けた久八と云ふ者が、代りに捕られて往つたげなが、其の場に落ちてあつた小柄が、かの傳兵衛殿が御屋敷から、拜領した小柄ぢや故、天命遁れず御詮議最中なれども其の夜から傳兵衛の行衛も知れず、其のあひ方の女郎はおしゆんと云ふ事をお上にもよう御存じで、親方の方へもいろくと、御詮議があれどこれも行衛が知れぬと云ひ切つて、今もめてある最中ぢやと、取々の噂評判おりやもう聞く度毎にびくくすると、聞くほどせまるおしゆんが胸、其の夜の起りも皆私故、どこにどうしてござるやら、心元なさ逢ひたさも、云ふに云はれぬ此の場のしな、いかゞと胸もふさがりし、母は一途に娘の可愛さ、コレくおしゆん案じる事はないわいの、併

し突き詰めた男氣で、ひよつとこちの家へ来て、刃物ざんまいでも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに、寝られぬまゝの物案じ、世間にたんある格な心中やなどしてくれたら、此の母は目かいは見えず、兄はアレあの様な臆病者、もしもの事があつたらば、跡で母はどうせうぞ、袖乞ひ物貰ひに歩いて、そりやもう一つもいとやせぬけれども、そなたの體に凶事でもあつたら、おりやもう直ぐに死んでしまふぞや、若い氣に前後思はず義理ぢや、イヤ人の落目を見捨て、はと、詰らぬ義理を立抜いて、年寄りの此の母につらい目見せてたもんなやと、可愛さ餘る親心、ア、南無阿彌陀佛も涙聲、兄も共々ヤコレおしゆん、今母者の云はるゝ通り、何の義理もへちまきいらぬ、どいてしまへばあかの他人、又おれも氣にかゝつて、好なめしさへ咽を通らぬわいのう、母者の氣休め、おれが腹助けぢやと思ふて、どいてたもヤコレ頼むくと正直一遍、母の心と兄の詞、勿體ないと思へども、切るに切られぬ胸の内、所詮死なねばならぬ身の、此の場を抜けて其の上でと、心一つに思案を極め母様、兄様お二人の、お詞よう合點いたしました、殊に

又傳兵衛さん、ツイ一通りで逢つた客、深い譯でもないわいなア、併し勤めのならひにて、人の落目を見捨てるを、里の恥辱とするわいな、とても末の詰らぬ事わしや得心してをりまする、ちよつて逢つて其の上で、憎し悪しもない様に、得心をさせまして品よう譯けの立つ様にイヤ、其の様に譯け立つると云やつても、あつちに得心せぬ時は、それ、行がけの駄賃馬で踏殺し、ア、イヤ、無理殺しにせうもしれぬ、コリヤめつたにはかみ合されぬわいの、お、兄の云やる通りぢや、そなたに怪我でもあつては、傳兵衛殿とやらも難儀、思ひ切るのがあつちの爲め、オ、あつちの爲、わが身に心引されては、つい捕へられるはしれた事、退狀をやつたらそなたの事も思ひ切つてオ、切るとも、遠い國でも影を隠したら、身を連れまいものでもない。コレむづかしかる共ツイ一筆、兄や硯箱取つてやりや、サ、早う、と母と兄、詞にいなも泣き顔を隠す硯の海山と重る思ひのべ紙に、筆の立てどの跡や先、涙に墨のにじみがちなる胸の内書残すとは露知らぬ、與次郎が傍から、コレイノコレ其様に長たらしう書ずとも、ツイどきまますと書いて

もすみさうな事ぢや。イヤノウ書いたものは後々迄も殘る物、男の去り狀と同じ事、とつくりと譯けの分る様に書いてやるがよいぞや。アイ此の狀にとつくりと、御合點の行く様に、兄さん、此の文お前からお渡しなされてオツトよし、此の狀さへあれば千人力ぢや、ハハ、マア、母者人も落着かしやれ、とやかふ云ふ内九ツ前お蘭も奥でサ、もうねやんせ、オ、それ、今夜こそゆつくりと、心よう癢るであらう、兄もそなたもそこに寢やと奥底もなき隔てをば、押し明けてこそ入りける。サアおしゆん、こちらも爰で往生いたそ、アイとおしゆんが俱々に、暫し此の世をかり蒲團、薄き親子の契りやと枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更け行く鐘も哀れ添ふ頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇過ぎし別れの言ひかはし、死なば一緒と傳兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、イむ軒は目覺えの、慥に爰と門の戸へ、さはる相圖の咳拂ひ、聞くにおしゆんが飛び立つ思ひ、上げる枕も打ちはづす、與次郎は傍に高野、心も俱に行燈の、灯火ふき消しきし足に心せく程明け兼ねる、戸口の鏝表にも、おしゆんぢやないか、傳兵衛さん、よう逢ひに来て

下さんしたと、云ふ聲寢耳に與次郎が、恟り起ると明くる門の口、妹が姿もくら紛れ、とらへる袖のふりあはせおしゆんと心得傳兵衛を、無理に引き込む取り違へ、戸口を内からびつしやり引立て、そりやこそつきに來おつたぞ、おしゆん必ず外へ出まいぞや、戸口はおれが押へて居る、ヤア門に居るは傳兵衛ぢや、おのれを入れよといふものかと、いふもがだ、胸ぶるひ、コレナア兄様わしや表に居るわいな、ヤ何ぢや、わしや表に居るわいなア、ヤア其の聲色置いてくれ、そんな事喰ふおれぢやないわい、母者人、傳兵衛がおしゆんを殺しに來た故、今表へたて出した、おれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され、加勢、とら、うろたへ騒ぎ母親も、何ぢや、傳兵衛の加勢、ム、まだ外に同類でもあるのかと、探り寄つたる傳兵衛が傍、コレ、おしゆん、頗ふ事はない兄や母が付いて居る、マア氣を鎮みやと撫でさする春中の手ざはり合點行かず、コレ、與次郎、どうやらこりや娘ではない様なわいのヤアくらがり紛れに材木が、紛れ込みやせぬかや、こなたつかまへて居て下されやと、探る手先に火灯箱、がち

ふるふ附木の光り、シヤアコレヤ妹ぢやない傳兵衛ぢや、お袋兄御、エ、面目もない此姿と猶も小隅に屈み居る。コリヤヤイコリヤ其の様にしほ、として見せておいらを欺して、おしゆんを突うとするのか、其手はくはぬと懐より一通取出しこは、ながら、コリヤ、傳兵衛、おしゆんと我と手が切れぬと、科人のわれじやによつて妹迄難儀する、それでさつきに妹に得心さしてどき狀が書かしてあるは、コレこれを見い、これぢやによつて、モウ、おしゆんが方に殘心氣は離れてあるわい、ム、スリヤおしゆんが其の退狀を、サアどき狀ぢや、エ、其心とは知らず云ひかはした詞を誠と思ふて、迷ふて來たが無念なわい、口惜しいと齒を喰しげる男泣き恨を聞くも隔たる戸口心は、さうぢやないぢやくり、オ、嘸ぞ腹が立う道理ぢや、無理じやわいなう、マア、とつくりと氣を鎮めて、退狀を見て下さんせいなア、オ、それでよい、長う物いやんな屑が出るぞ、コリヤ傳兵衛おれが讀んで聞かしたうてもな皆目おれはナニアソレオ、祐筆ぢやわい、サアサア早うと封じめ切り突付られて目に溜る、涙を拂ひ、ナニ書置の事ヤア何ぢや、書

置ぢや、コレノ、兄正直な、悔りする事はないわいな、そなたは無筆わしや盲、書置ぢやど讀違へ、うろたへさして門口へ出て、娘を存分にせうとのたくらみ、ホ、ホ、オホ、ホ、ホ、そんな嘘は喰ませぬ、サアほんまに讀ましやれ、コレコレ與次郎、表の娘に氣を付けて門の戸を明きやんなや。オ、呑み込んで居る、爰にはおれがへ、へばり付いて居るわい、サア、早う讀みやいものこそよう書かね聞く事は祐、ヤナニ無筆じやないわい、サア讀だ。エ誠にこれ迄の御養育、海山にも譬へがたき親の御恩、殊更不自由なる御身の上、何卒首尾よう勤めを遁れ、世を樂に過させまし候はど、せめて少しの御恩報じ孝行の片はしにもなり候はんとそれのみ朝夕祈る處、二世迄と云ひ交し、傳兵衛様、思はぬ此の度の御身の難も、根を尋れば皆われ故に候へば、今さら見捨て候ては女の道立ち申さず候、不孝とは思ひながら、俱に覺悟を極る。オ、母者人、どうやら風がかはつて來た様な、サイノウわしも胸がどきくとサア其跡をちやつと讀んで下され下され、エ、俱に覺悟を極る、先程傳兵衛様へ退狀と申して認めしは此の事

申上げ度きまゝ追狀と偽り書き殘し。何事も前  
世よりの定り事と、御諦め下され候、申上げたき數々は筆にもつくしがたく候へ共、心せくまゝ申入れ。オ、さてはさうした心かと驚く傳兵衛親子はうる、エ、氣づかひな、コレ兄や娘を家へ、早うと母があれれば與次郎も、戸口明ければ走り行く、妹を無理に四人が、顔見合して溜息つき、涙はさらにわかちなく、何と詞も傳兵衛が、泣く目を拭ひ、一旦いひかはした詞を立て、俱に死なうと覺悟して、義理を立てぬくそなたの貞節忘れはせぬ嬉しいぞや思ひ廻せば廻す程、我こそ死なで叶はぬ身、そなたは科のない身の上、俱に死んではお二人の歎き、命ながらへなき跡の、とひ弔ひを頼むぞと詞にわつと泣き出し、そりや聞えませぬ傳兵衛さん、お詞無理とは思はねど、そも逢ひかゝる始めより、末の末迄云ひかはし、互に胸を明しあひ、何の遠慮も内證の世話しられても思にきぬ、ほんに女夫と思ふ物、大事の夫の難儀、命の際にふり捨て、女の道が立つ物か不孝共惡人共、思ひあきらめコレ申し、一緒に死なして下さんと隠せし剃刀取り直す。マ、待て待ちおれやい

く、コリヤやい、これで死ぬると命がないぞよ、コリヤまあ何の事ぢや、とんと分らん様になつてきたわい、殺しに來たと思ふた傳兵衛殿より、今ではわれの方が手強うなつたぞよ、コリヤマアどうしたらよからうぞと、云ふもおろく母親も、オ、さうぢや、我が子が可愛くくと子故の闇に脇ひら見ず、これまでおしゆんがお世話になつた、恩も義理も辨へず、一圖に中を引別けうと思ふた母は義理知らず、賤しい勤めする身でも、女の道を立て通す、娘の手前目ない、そなたの心に恥入つて何事もいひませぬ、傳兵衛様と一緒に、コレ死出の道連れしやいのう、したがこれ申し傳兵衛様、定めて親御様達もござりませうが、親の心といふ物は、人間はおろか、たとへ鳥類畜類でも、子の可愛さにかはりはないもの、おしゆん傳兵衛と云はず氣か、もしやお前が死なしたつたと、親御達が聞かしやつたら、悲しうてく此の世に残つて居る氣はあるまい、何國いかなる國の果、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて下さりませ、娘が心に恥入つて、天にも地にもかけがへない、可愛い我が子を心中に合點してやる親心、爰の道理を聞き分けて、コレ

拜みます頼みますと、手を合はしたる母親の、子故に迷ふ闇の闇、二人は何と詞さへ涙に涙結ばるゝ、血筋のわかれ與次郎も、涙の雨の古布子、袖喰ひしぱりしやくり泣き。ア、傳兵衛様の歎かしやるも道理ぢや、又お俊の泣きやるも道理ぢや、母者人の泣きやしやるのもなほ道理ぢやく道理々々と云ふては、ねえからはあからいつ迄も分らぬ道理ぢや、がコレ傳兵衛様、母者人が今の詞、御合點が参りましたか、エコリヤ我も得心してくれたか合點がいたか、得心してくれたか、合點がいたかサ、く、合點したらばどうぞ此の場を、立退く分別、併し其形では人目に立つ、京の町を離れる迄、此編笠で顔をかくし、幸ひの猿廻し、まめで二人が未長う、目出たう女史になりとげる、門出の祝ひに此與次郎が、お初徳兵衛が祝言の壽、此方衆も生別れの盃、ハ、ハ、ハ、イヤく祝言の盃と祝ひ諷ふも聲びくに、お猿はめでたやなく、挿入姿ものつしりとく、コレさりとはくウあるかいな、さんな又あるかいな、オ、徳兵衛様ござんせ、餘りこな様が來やうが遅いによつて、お初様は顔眞赤にして腹立て、居やんすわいのうコレくお初様、

鞆殿が盃をしたいといのう、機嫌直して盃を、戴かんせ  
 コレ〱〱いたゞくノウ盃を、さんな又あるかいな、  
 ヤコレ〱コレ鞆様、足で盃をさすはあんまりつれない  
 それでは嫁御様が戴かんせぬわいのう、ひざらずと、ぼ  
 んまにさしてやらんせ〱〱さうぢや〱〱そこでお  
 初さんがいたゞいた物ぢやコレいたゞくのう盃を、さん  
 な又あるかいな、コレ嫁御の晝寝もころりとせい〱〱、  
 ナコレエあるかいなさんな又あるかいな、コレ〱〱鞆様  
 餘りつれなうさんすによつて、おしゆんヤアノ嫁御様が  
 起さんせぬわいの、そこらでちよつと起したり、ヤそこ  
 らでヤチヨイ〱〱トコナト起したり、おこさん  
 かい〱〱、又てんごしておるわい、コリヤ起す〱エ、  
 起さんかい、コレハしたり俺の顔迄かきおるわい、エ、  
 何さらすぞいとつともふ、去りとは〱ノウあるかいな  
 さんな又あるかいな、起きたら互ひに抱付きやれ、オ、  
 それで機嫌が直つたぞ、エ、〱〱、あるかいなさんな又あ  
 るかいな、くるりと返つて立つたりな立つてくれ、コレ  
 〱〱コレ立たしやませ、序いでに日和を見てたもれ、ア  
 〱〱よい女房ぢやに〱〱ノウあるかいな、さんな又あるか

いな、日和を見たらば落ちてたも〱〱、オ、さうぢや  
 〱〱〱〱、お猿は目出たや目出たやなサ、〱〱〱〱、きり  
 〱〱〱〱此家を猿廻し、まさる目出たう何時迄も、命まつた  
 う仕てたもと、目は見えねども見送る母、詞も此の世で  
 聞き納め、心の内の暇乞ひ、明日の噂と形ふりも、やつ  
 す姿の女夫づれ、名を繪草紙に聖護院森、をあてどにた  
 どり行く。



情



# 御 挨拶

大東亞戦争の赫々たる戦果に思ひ及びまする時  
銃時に於ける私共は一日も現状に安んずることな  
く、更に感奮興起して國力の充實を期さねばなら  
ぬことゝはゞかりながら存じます。就きましては  
聊か戦捷祝賀の意を含め、且つは精神作興の一助  
にもと「國威は振ふ」と題して新作曲を御尊覽に  
供することゝいたしました。元より短時間にて  
充分の意を盡す能はず、唯々祝賀曲とも御覽くだ  
され、出演連中の熱意のあるところを御鑑賞くだ  
さいますれば洵に幸甚に存じ上げます次第でござ  
います。

敬 白

昭和十七年二月

白 井 松 次 郎

西 亭 作詞・作曲 大塚克三編舞  
食瀧南北演出並衣裳考案 村田芳生舞臺照明  
大東亞戦争に因みて

國 威 は 振 ふ 全九景

## 第一景 元軍來寇

天津神、七世の後の天が下、照らしまつらふ大神地神  
五代の鎮まりて、人皇の始長くも、神武天皇踐祚あり、  
皇威八紘にうるほして、悠久爰に千九百、四ツ一十年の  
時ぞ今。弘安四年五月闇夢打ち破る胸羅の音、再び襲ふ  
元の軍、多々良の濱に寄す波の競ひに競ふ十餘万、今國  
難に上下無く、固き決意も皇民の心ぞ一つ悲壯なる。

## 第二景 南陣注進

爰、南陣の固めには、河野通有通時とて、菊池竹崎諸  
共に武勇統紫に並びなき、其陣立の物々し、折もこそあ  
れ武者一騎、馬を飛ばしてはせ來り、ヤア〜南陣の内  
へ物申さん、我は本陣の使者菅丹波御注進、と呼ばはり  
ける、河野が郎黨走り出で、ナニ御使番とや御苦勞千万  
シテ〜注進のその趣き、されば候、先刻對馬よりの早

人形役

使者菅丹波  
河野郎黨

吉田多三郎	桐竹龜松	割	豊澤團伊三	鶴澤綱延	野澤勝芳	竹澤團六	野澤吉五郎	豊澤新左衛門	豊竹つばめ太夫	竹本播路太夫	竹本伊達太夫	豊竹呂太夫	竹本相生太夫	竹本織太夫
-------	------	---	-------	------	------	------	-------	--------	---------	--------	--------	-------	--------	-------

舟にて、注進ありて候は、彼地に屯の後詰の軍、高麗江南の數万の勢援軍として追々に對馬を出でて向ひし由、今宵夜半は多々良の沖、勢を揃ふは必定なり、かくてもあらば猶々に、夢々油斷は致されず、士氣を鼓舞して御固め此上大切肝要との時宗公の御軍令、先きを急ぎの使番、乗打御免と式禮も、そこへ心急ぎの駒、引返してぞかけり行く。

第三景 通有陣所

早夕陽もかたむきて、陣所へはかざり火の燃ゆる軍人の赤心に、敵も恐れて船がより、對陣すでに十餘日、河野が陣の帷幕の内、死を一筋の通有が、心面にあらわして、いかに通時、尋常ならぬ今度の合戦、畏れ多くも上、龜山上皇には、敵國降伏の御祈願に、御製「世の爲に身をば惜しまぬ心とも荒ぶる神は照らし覽らむ」と御詠じ我國難に替らせんと、伊勢大崩に御宣命を捧げまつるぞ勿躰なや、この皇恩に我等が身の、幾千屍をさらすとも、やわか神國寸土たりとも、夷敵に汚する勿れ、すでに先刻決めし通り、明曉奇襲と極むる上は、何れ命を筑紫瀧阜怯の振舞仕給ひそ。仰せまでも候はず、一死

西島伍長	荻野中尉	看護兵	大江少尉	大江恭臣	藤本軍醫	海軍大佐	陸軍大佐	元の雑兵	張多隣	元の隊長沈元	軍兵	竹崎季長	河野通時	河野通有
吉田榮三郎	吉田光之助	大ぜい	桐竹紋十郎	吉田玉幸	吉田玉市	吉田玉藏	吉田榮三	大ぜい	桐竹紋太郎	吉田玉徳	大ぜい	吉田玉藏	吉田光之助	吉田榮三

元より君國の爲、武門の譽れこの上や候べき、執權北條時宗公にも、決死決意のこの國難尋常にては中々の事、寡兵を以て機を制すは、是ぞ神國無双の兵法、何條元軍幾万たりとも、斬つて／＼斬りまくり、武威八紘にかゝやかさん、御安堵あつて候べし。と、實に後の世にかくれなき河野通有通時が勇武の程ぞ頼もしき、當番の兵士まかり出で、ハツ申上げます、只今は北陣の將、竹崎季長公御越しにて候、何季長殿御來陣とな、夜陣の訪れ何かは知らずとく是へ御ともなひ申せ。ハ、ツ長まつて候。と立つて行く間も荒武者の小手脚當もりしげに早入り來れば河野道有。これは、よくぞわせられし竹崎殿、イザ先づ是へ、ア、イヤ、非常の陣中御氣配御無用、イヤナニ通時殿にも日毎の對陣さぞ氣づまり、何れも陣中平懷御免。とむづと座して一融す通有不審の眉を寄せ、季長殿、打見る所、おことが面鉢常ならずとさら夜陣の訪れは、されば候、某推參外ならず、思ふ仔細の候て、今宵御暇乞に參つて候、知らるゝ如くかく對陣以來、未だ雌雄の合戦もなけれど、生死不明の戰場なれば、何時如何なるやも計らず、若しかく申す季長が明日にも討死と聞かれなば、後陣のことはくれゝも、

片岡	名淵	宮田	武田	片山	小林	西脇	長谷川	柴田	筒井	伊藤	平尾	引田	天滿	山下
少尉	少尉	上等兵	上等兵	一等兵	上等兵	伍長	伍長							
桐竹	吉田	桐竹	桐竹	吉田	吉田	吉田	桐竹	吉田	吉田	吉田	桐竹	吉田	吉田	桐竹
門造	玉市	紋之助	門次	利男	兵次	玉米	小紋	万次郎	兵二郎	兵一郎	紋太郎	多三郎	玉徳	紋司

御頼み申す通有殿。と詞少なに語るにぞ通有猶も不審げに、これは又改つて、合點の行かぬ仰せかな、そも合戰の常として、命は捨つるは武士の習ひ、まして今度の此國難、我國民は一樣に、皆々覺悟はあるべけれ、なれ共事急なる其お詞、深き仔細の候べしおかまひなくば明かされよ。さらばお話し申さんが、無謀の仕義とお止めもあらんなれ共、一度思惟の我一念必ず御止め御無用ぞ。承らねば仔細は知らず、いかにも仕義によりては止めはせじ、先づ何がな語られよ。さらば打明け申さん。と心かなめの軍扇に力をこめて季長が、そもく去んぬる文永の役、敵敗戰の意恨に燃え、再度襲ひし元軍は、先きに幾倍數千の兵船、たとへ幾千幾万なりと、何條恐れ申さんや、寸毫尺土も我神國、けがさす事の荒夷、されど雲霞の敵大軍、夢々油断はなり申さぬ、今又受けし本陣の急使の次第聞つらん、一日待てば一日の敵は後詰めを増すばかり、守る計りの戰陣は、却て士氣のゆるむのおそれ、折よし吹くは天津風、我は決死の手兵をあげ、この機を襲ふは兵法の、奥義を直ぐに敵船の眞ツ只中に切つて入り、夷が荒ぎも冥途の土産、死すべき時に死してこそ、ますら卑人の本懐なれ、死地に入りてぞかつ戰、

御稜威の光り神國の、武威をしめすは今此時、後陣の事

はくれん、頼み存ずる通有殿。と、勇氣りんぜん季長が決意の程ぞ頼もし、通有我が意と莞爾と笑み。ホ、ヲ健氣なり季長殿、なか御止め申さんや、さらば我等も申さんず、これも今宵はその謀議、一門引具し敵船へ打入る手はずもとのひいる、貴殿の心底聞くからは、さらに勇氣も百倍増し、共々御供仕らん。フムさては和殿も、通時殿にも。仰せ愚かや季長殿、なか後れて候べき。こは昔はれたりな通時殿、實に頼もし。と敵をのんだる不敵の鬼武者天晴れ丈夫の魂なり。折ふし風に吹送られ、連れて聞ゆる胴羅の音、季長きつと聞き耳立て、あの物音は後詰の着到、エ、かしましき唐人共ろくにも立たぬこけおどし。蚊程にうるさきどうによふ八、明日のばえ面見ものに候、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、如何に各々、幸先き祝ひ門出の盃、一献くまん季長殿、通有看仕らん。面白の事なれや、實に面白の事なれや、敵の大船掛枕我は命も捨小舟、えい、運を天津風、木の葉と散らせ夷敵原櫻と散らん大和魂いざ諸共に。ヤア、方々勝鬨。エイ、オー。

#### 第四景 元軍討入り

筑紫多々良の海せまく、元の軍船滿々たり、ちやるめら太鼓どらによふ八、打ち立て、舟音頭只かしましき計りなり、中に大船大將の座船のとも兵士共、隊長沈元聲はり上げ、多隣、張多隣、來々。と、呼ばわれば、張多隣走り出で、沈元隊長何用あるか、大將より酒下さる、見張り止めて呑むよろしいな。日本兵中々豪膽中々強い、もし攻めて來るあぶないナ。なん、我國忽必來王、中々えらい、この舟大將の船一番大きいナ日本舟小さいナことに此波風荒い、ナカ、日本兵來る事無い、見張よろし、無用。それもそふあるなこの酒對馬の酒ぶんどる中々うまい、一ばいやるよろしこれ、阿呆丹、お前胡弓する、歌うたふよろし、皆々騒ぐよろし、エイゲツツ。イヤチンツイニ、タナヤアンハン、マイイスンナコチマリラツソワン、エンチエン、パーヌチャパツライパイソワン、パンヌチャナコミンクソラツソワン、アーンヨー。キャツ、ウン、ワアツ日本兵、それ來たナ、石火矢、ソレ皆々討つよろし、ワアンウン、それ、方々、勝鬨、エイ、オー。

## 第五景

### 大本營陸海軍部發表

廻る日の、年はうつれど彌榮ふ竹の團生の尊くも我日の本のゆるぎ無き、大本營陸海軍部發表（十二月八日午前六時）帝國陸海軍は本八日未明西太平洋において米英軍と戰鬪状態に入れり。本日 長くも大元帥陛下に於かせられましては、宣戰の大詔を渙發あらせられ、爰に大日本帝國は敢然として暴辰米英に對し宣戰の布告を致しました、時これ正に昭和十六年十二月八日。いまや我國未曾有の大難局にまことに長れ多い事でありすが御聖斷により。斷然として打開せられ、一億一心の向ふ所まさに天日を仰ぐの感があるのであります、今や御稜威の本忠勇無比なる皇軍將士は電光石火の神速と決河の勢を以て陸に海に空に勇戰奮闘致して居るのであります、緒戦早くもハワイの大奇襲戦には米太平洋艦隊、空軍の全滅、マレイ半島上陸、續く英東洋艦隊覆滅、フィリッピン上陸等々正に有史以來の大戦果であります、然しこの戦捷に酔ふ事なく、勝て兜の緒をよめ、一億一心固き決意を以て前途の光明に突進致さねばなりません。

## 第六景

### ハワイ大空襲

## 第七景

### ラモン灣上陸母船大江少尉戦死

思ひはるけきフィリッピンラモン灣頭敵前の上陸一步先發隊、敵の機銃の彈の雨、壯烈悲壯日本魂、先發隊重傷者であります、そふかよし、アツ大江少尉か、軍醫殿残念ツ……ツツ弟か、しつかりせい兄弟恭臣だ。兄さん残念です。ウツ察する、傷は浅いしつかりせい。イヤ自分の事はかまはず部下の負傷者に早く手當をしてやつて下さい。心配するな、他も皆手當をして居る、大江君、僕はあちらへ廻る、こゝは君に頼んだぞ、残念乍ら助かるまい、よく別れを。弟、よくやつたぞ。兄さん自分は敵兵の顔も見ず上陸の第一歩で……申譯けありません。ウムツ無念じやる……氣もちはよつく解るが弟、お前達のその負傷で、どれ程戦友が奮起するか知れぬ、敵は今に取つてくれる、今こそ米領に初めての日章旗が燦然と打建てられるのだぞ。ヲ、日章旗——想出の伯林の空高く揚つた、アノなつかしい日章旗、今度こそは世界の空高く揚るのだ。弟、聞ゆるか、あの音、アノ軍靴のひびき、後續部隊の突撃だぞ。ヲツ聞へます——勇ましい進撃の聲ア、御稜威の光りは——世界の果てまで輝くのだ

## 第八景

### ラモン上陸戦

天皇陛下萬歳、大日本帝國萬歳、萬歳——

## 第九景

### 國民總進軍歌（全員合唱）



吃又平名筆の段

切竹本住太夫

喜代之助改め

野澤吉三郎

ツレ 鶴澤鶴太郎

人形役割

土佐將監 桐竹政龜

將監奥方 桐竹紋太郎

修理之助 吉田榮三郎

吃の又平 吉田玉藏

女房お徳 桐竹紋十郎

雅樂之助 桐竹門造

傾城反魂香

吃又平名筆の段

寶永五年四月（二三六八）竹本座上場の近松門左衛門作「傾城反魂香」三巻は後年色々と改作された。例へば享保十七年五月（二三九二）豊竹座上演の「今様傾城反魂香」、延享元年十二月（二四〇四）豊竹座上演の「遊君衣紋鑑」、寶曆二年三月（二四一二）竹本座上演の「名筆傾城鑑」等で、この吃又平名筆の段は「名筆傾城鑑」全十二段の第四段目に當り（土佐將監閑居の段）、吉田冠子、中邑閏助、三好松洛等の合作である。尙、「名筆反魂香」「名筆吃又平」の外題でも上演されてゐる。

梗概

江州高島家の繪所土佐將監は故あつて今は閑居して居る。

その將監の弟子に浮世又平と云つて生れつき吃りの男が居た。又平、家は貧しく、旅人を相手に



大津の宿外れで粗末な繪を賣り、細い煙を立て乍らも土佐の苗字を許されたいと精進努力を續けてゐるのだつた。

或る日、又平は女房お徳と共に將監の閑居を訪れ、苗字を許されたいと懇願したが、將監は又平の心を勵まさんが爲め、態と情無くして許すとは云はなかつた。

道々に何やら村人達が立騒ぐのを聞けば、この邊りに虎が現はれたと云ふ話。それは狩野元信の畫いた虎の名畫に魂が入つて抜け出したので、將監は弟子の修理之助にそれを鎮めさせ、其功に依つて又平よりも先きに土佐光澄と名乗らせたと云ふのであつた。

又平は所詮望みは叶へられぬかと、果ては吃に産付けた親を怨んで泣き悲しんだ。

其時、狩野の弟子雅樂之助が血に染まつて駆け込んで來た。そして姫君の危険を知らし助勢を頼む。

將監も心あせつて姫君を助けに修理之助を向はさうとする。

又平は大功あらば土佐の苗字を許すと云ふ將監の言葉に自分を遣つて呉れと頼むが、將監は許さなす。

今は全く絶望した又平は手近にある手水鉢を石塔と見立て、それに心魂こめて我が繪姿を畫き、この場で自害と決心するのだつた。

と、不思議にも又平が念力徹して畫いた繪姿は尺餘の御影石の裏へ通り、兩方から一度に畫いた様な入神の筆勢。それを見た將監も心に感じ、改めて土佐の苗字を許す事になり、姫君救援を許す心勇んだ又平は大頭の舞を舞ふ。

庭に下り立つた將監は又平の繪像を畫いた手水鉢を二つに切割り、「舌はもと心の臓、今石面の繪を切つて心の臓を立割つたれば、吃る事はあるまい」と云ふので、又平喜んで舌を廻すに少しも吃らず、らりるれる、まみむめも、狸百疋棒百本

等と早口に云ひ試み、勇み勇んで出て行くのだつた。

(佐和利) 吃又平名筆の段

此將監は近江の國高嶋の御家來筋、則ち禁中の繪所小栗宗丹と筆の争ひ其上高嶋家の重寶雲龍の硯を宗丹違つて所望す、イヤキやつに持せじ我にたべと互ひに意地を言ひつゝのりついに御前のお聞きに立つて某は勘當受て此浪人住居、今でも小栗に従へば富貴の身と榮ふれ共一人の娘おみつに君傾城の勤させ子を賣つてくふ程の貧苦を度ぐは何故ぞ、土佐の苗字を惜むにあらずや修理之助は只今大功有そちには何の功が有る琴碁書畫ははれの藝貴人高位の御座近く參るは畫人物を得言はぬ身を以て及ばぬ願ひ似合ふた様に大津繪畫いて世を渡れ茶でも呑んで立歸れとあいそもなく叱られてお徳ははつと力を落し、コレ又平殿こなたを吃に産付けた親御を恨きつしやれと頼みなく、又平も我咽ぶえをかきむしり口に手を入舌をつめつて泣けるは理り見えて不惑なる。

女房聞もあへず、常々大頭の舞を好きわれら諸共つれ  
脇にて舞はれしがふしの有事は少しも吃申さず又平殿悦  
びにめでたう舞て立まいか、ヲツト答て立上り古き舞を  
身の上になぞらへてこそ舞たりけれ、去る程に鎌倉殿義  
經の討手を向べしと武勇の達者をゑらばれし夫は土佐坊  
是は又土佐の又平光起が師匠の御恩を報ぜんと身にも應  
ぜぬ重荷をば大津の町や追分の繪にぬるごふんは安けれ  
ど名は千金の繪師の家今墨色を上げにけりかくて女房い  
さみを付又もや御意のかはるべき早御立ちとすゝめける  
ヲ、いしくも申されたり身こそ墨繪のさんすい男紙表具  
の體なり共朽て朽せぬ金砂子極彩色におとらじと勇すゝ  
みし勢はゆゝし頼もし我ながら適繪筆の健氣さよ唐繪の  
樊噲張良を楯についたと思し召イザお暇と立出る。

## 野澤吉三郎の代々

### △初代

不詳。(但し淨瑠璃大系圖に通稱富小路三代野澤喜八郎の門人初代野澤庄治郎の門人に野澤吉三郎の名ありまた邦樂年表には文久元年十一月道頓堀竹田芝居に出

勤三絃連の中に野澤吉三郎の名あり)

### △二代

通稱淀屋橋六代野澤吉彌の前名。文久三年四代野澤吉兵衛の門に入り兵内と名乗り、明治元年三月二代野澤吉三郎と改名。十七年九月病氣療養中六代野澤吉彌となり明治十九年十二月四日歿。行年三十三歳。

### △三代

通稱江戸堀六代野澤吉兵衛の前名。明治十年一月六代野澤吉彌(吉三郎時代)の門に入り兵三と呼ぶ。明治十七年二月三代野澤吉三郎となり、同廿四年一月更に七代野澤吉彌と改名。同四十年九月、七代吉彌改め六代野澤吉兵衛となり、後大正十三年六月四日歿。行年五十四歳。

### △四代

現代の七代野澤吉兵衛の前名。明治廿三年六代野澤吉兵衛(三代吉三郎時代)の門に入り兵市と呼ぶ。同卅四年五月、更に市次郎と改名し、同四十一年二月、續いて四代野澤吉三郎となり、大正十五年(昭和元年)九月、七代吉兵衛を相續す。

### △五代

大正六年、七代野澤喜八郎(通稱門前)の門に入り、その破後現七代野澤吉兵衛の預りとなり、野澤喜代助と稱してゐたが當興行より五代野澤吉三郎を襲名する事になる。(主として「野澤の面影」による)

# 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來

舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團

になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。

けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、

五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、

淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遺ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して来た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は

永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を

得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された。一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大内鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日

から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手、といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから

の名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のことで、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より拔萃)

## 文樂座小史 (昭和十六年調査)

- 竹本座創立 (現今ヨリ二百五十七年以前)  
貞享元年二月 (道頓堀西ノ芝居)
- 文樂座發祥 (現今ヨリ約百五十年以前)  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代  
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代  
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代  
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代  
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代  
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承  
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失  
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代  
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ  
其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立  
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

## 出版豫告

序文 豊竹古靱太夫  
齋藤清二郎著

## 文樂かしらの研究

内容 四六倍判

精巧寫眞版 百四十頁  
原色版 六葉  
本文記事 百頁  
定價 未定

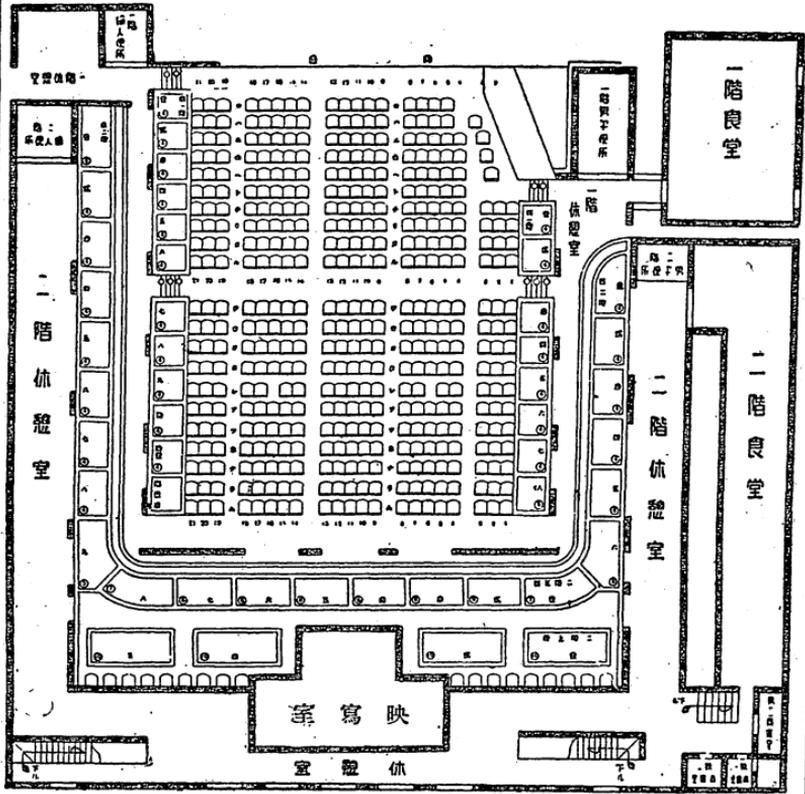
文樂かしらに關する貴重なる我邦最初の  
の文献

三月刊行豫定

發行所 東京アトリエ社

● 豫約御申込は文樂座賣店へ ●

# 文樂座御場席案内



御観覧席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符。壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹番で御座おます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

# 二月の芝居御案内

川湊戸神 <b>場劇竹松</b> 四〇四四川湊話電	條四都京 <b>座南</b> 五五一一一國紙話電	堀 傾 道 <b>座 角</b> 二一二二南話電	堀 傾 道 <b>座 中</b> 九七二一南話電	阪 大 <b>座伎舞歌</b> 六二八二戎話電
日初日一 開二午正晝 演回時五夜	日初日一 開二午正晝 演部時五夜	日初日一 開二午正晝 演回時五夜	日初日一 開二午正晝 演部半時四夜	日初日一 開二午正晝 演部時五夜
<b>松竹家庭劇</b>	<b>西關精銳大歌舞伎</b>	<b>厚生劇</b>	<b>東京新派</b>	<b>西東合同大歌舞伎</b>
お十山水 祖二の上 母月榮隣 さ八日迄 ん日光組	新う關名待 版ぐ寺宵 歌ひ小魂室 祭す町香節	第一紅 第二海 第三五 第四御 禊代 さく友 ら厚碗	親柏勾 家ひ 夏刷 吉毛	二妹元鳴 背山祿神 人婦忠會 知女庭臣 盛盛訓藏我
泣愉國張 顔し策子 とき働令 笑働令 顔き嬢犬	本藝信嫗 朝道州 廿一川山 四代中 孝男島姥	葉の茶 葉の茶 葉の茶	金團草 色平の 夜物 叉語花	木艷五本 ノ容朝 ル女條 ル舞四 市衣橋孝
一 四等席 觀 二 三等席 劇 三 二等席 料 四 一等席 十 圓 二十 圓 錢 (稅別)	一 四等席 一 二 三等席 部 三 二等席 觀 四 一等席 劇 圓 十 圓 料 圓 十 圓 錢 (稅別)	特 一 四等席 觀 一 二等席 劇 二 一等席 料 圓 十 圓 錢 (稅別)	一 四等席 一 二 三等席 部 三 二等席 觀 四 一等席 劇 圓 十 圓 料 圓 十 圓 錢 (稅別)	一 櫻 一 部 二 菊 一 部 三 三 一 部 四 等 一 部 席 席 席 席 圓 圓 圓 圓 十 十 十 十 圓 圓 圓 圓 錢 錢 錢 錢 (稅別)

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける嚙土藝術、三位一

齋の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐるます。

文樂座人形淨瑠璃は 嘗に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に

背かねば、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居ります。尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に

設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

賣品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事 西側別館の階上、階下にお食堂と喫茶室が御座ります。

賣店 は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と

二階に御座ります。

場内にて寫眞撮影は通對にお斷り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け

下さい、其儘一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其儘の事故にて出席不可能の場合は乍勝手代役にて相勤

めますから謹め御諒承願ひます。

## ◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内所を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に致しました。御一報次寫登上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十七年一月廿一日開演  
昭和十七年二月一日開演  
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市西區久左衛門町八番地  
松竹株式會社大阪支店  
發行所 江鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二  
押原屋 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

